

# 若き日の思い出

(青春時代)

## いい日旅立ち

柳井医師会 織田 哲至

子どもたちが成長し孫の世話も一段落し、純粋に女房と二人だけの生活は10年となりました。旅行や美術館巡りなど楽しい生活でしたが、コロナ禍でかごの鳥状態です。本来であれば昔を振り返ることもなかったと思います。県医師会報で若き日のことを募集しているにもかかわらず、書いておられるのをほとんど見たことがありません。確かに知らない人の若い日は、関心がないのも頷けますが、この際、記憶の糸をたぐってみます。

私は一人っ子で、親の仕事で約3年に一度転校を繰り返していました。一番強烈だったのは、昭和46年(1971年)2月下旬、九州大学医学部受験前に門司から鹿児島へ転勤になったことです。3月の初めが受験日で、どこに泊まってどんなことをしたか、あまりのことに記憶も定かではありません。案の定、不合格で第二志望の理学部に回され、意気消沈です(自分の点数の8割位で第二志望の合格点に達すれば、合格という今では考えられない変な制度がありました)。このころの、国立大学の医学部は、一期校(17校)、二期校(8校)の制度で、一期校に合格していても掛け持ち受験ができました。競争率約20倍の二期校の山口大学を3月下旬に受験です。まず合格はないだろうと思い、宇部新川駅前の山田屋旅館に宿泊、何人かとの相部屋でよく寝られません。漢文が以前に読んだことのある文章のためか、運よく合格できたのでしょう。入学式は学生運動の真ただの中、学部ごとの入学式です。偶然にも横に座っているのは九大受験の時に隣に居た人であっと驚きです。東大理Iを蹴って入学した人も居ました。女性は14人で他の学年と比べ少し多

かったですが、令和2年(2020年)の38人と比べると少ないです。女性差別ではなく志願者が徐々に増加してきたと推測します。

教養課程の時は山口市で暮らし、ソーシャルダンスに明け暮れ、競技ダンスもしましたが、いつも予選落ちです。ダンスホールでおばさん達と踊って話し、それが縁で息子さんの家庭教師をしたこともあります。昭和48年専門課程で宇部に引っ越しです。解剖学実習は皆まじめで、独特のホルマリンのにおいとラテン語は、未だに脳裏に焼き付けられています。マンドリンを適当に弾き、コンパに参加し、マージャンをしながら先輩から過去問を聞いて留年することもなく、楽しく過ごします。親も鹿児島から釧路に転勤になり、夏休み、冬休みには友達と北海道旅行です。休みでない時に親から、「同級生の女の子が一人でうちに泊まりに来たよ。彼女なの？」と言われ、びっくり仰天です。

昭和52年(1977年)に卒業し、あこがれの東京で研修医生活です。多くの女性に囲まれた生活ができるから選んだと思われませんが、当時、東京女子医科大学脳神経外科は日本で一番に頭部CTを導入し、症例数が多かったためです(昭和50年8月26日、悪性黒色腫の多発性脳転移を頭部CTで初めてとらえ、日本中に衝撃が走りました。病理解剖で腫瘍は大きくなっていましたが、位置は同じでCTの真の実力が分かったのです)。医師国家試験は広島で受け、受験者数は全国5,000人位で、合格率80%前後です。合格者の発表は地元の新聞に出ますが、東京では合否不明のため前日の夜、他の研修医と医事新報社に行

き、合格者名簿を見てホッとしたのを覚えています。試験日も合格発表も今より1か月以上遅かったです。

脳神経外科を選んだのは、国家試験の勉強中、公衆衛生学で日本人の死因第一位が脳血管障害にもかかわらず、脳外科医の数が圧倒的に少なく、能力がなくてもやっていけると短絡的に考えたためです。新宿、六本木のナイトクラブ（今で言う接待を伴う飲食店）、高級ホテルでの食事、目の前で焼いてサービスしてくれるステーキのお店に連れて行ってもらい、初めての事ばかりで脳の中はお花畑です。アパートを借りているのがもったいないくらい、病院に寝泊まりして遊び歩く毎日ですが、大学の給与は非常に少なく、アルバイトで生活費を補うのは日常的な事です。遊び疲れもありましたが、親（このころ、再び門司）から結婚のこともあるから山口に帰って来いと言われて、東京生活とおさらばです。昭和53年7月に宇部へ帰り、点滴に入れる薬がすごく少ないのに言葉を失います。あー、東京、なつかしい。

国立下関病院の脳外科が、山口大学の関連病院になるので、10月には下関へ転勤です。初めて医師住宅なるものに入居しましたが、三部屋もあり、一人では広すぎます。このころに運命のお見合いをします。周南市にある女房の実家（現在、国の登録有形文化財）で会った時、振袖を着て可愛いのですが、その袖を踏んでビリビリと少し破れ、こけそうになり、猫、犬、豚のものまねをするユーモアたっぷりの人で、昭和54年に結婚です。その時、私の貯金は0円。費用はすべて親から出してもらい、お金はあればすべて使う世間知らずです。昭和55年に長男が生まれる時に、医者なのであまり早く病院に連れて行ってはいけません。医学知識があるから、陣痛10分になるまでは家に居させよう。病院までは歩いて数分にもかかわらず、予想を超えて陣痛が早く、痛みも強くなり夜中に車で行き、病院の廊下で破水です。教科書の知識だけではだめで、やはり経験が物言う世界だと痛感しました。ポリクリで初めて分娩に立ち会った時、産声と同時に血色がパーッと赤くなるのを見て、痛烈に感激したことを思い起こしました。

長男が4か月の時に神経病理を勉強したくて新潟へ転勤です。ギタマンクラブの顧問が病理学の教授であり、学生時代に下宿が隣の病理学教室の大学院生から英語の病理学の本読みに引きずり込まれた事に合縁奇縁を感じます。新潟大学脳研には、多くの解剖された脳の標本やプレパラートがあり、晩御飯だけ自宅で食べては勉強に行く毎日で、長男から「おじちゃんまた来てね」と言われショックでした。平成30年（2018年）7月NHKの「アインシュタイン消えた天才脳を追え」という番組で、恩師の名前が取材協力者として出て、アインシュタインの脳標本の一つが脳研にあることを知りました。私はそれを見たことがなく、非常に大事なものであったのでしょうか。恩師との手紙のやり取りの中で、NHKから写真がまだ戻されていないと書かれていました。昭和57年に長女が誕生し、その年の10月に宇部へ引っ越しです。専門医の試験勉強、開頭手術、ラットでの実験、血管吻合術の練習などで病院漬けでした。平成元年（1989年）10月、実家の柳井へ引っ越しして、私の転勤、旅は終了です。

旅は心の成熟の過程と考えることもできます。若いうちは、まだまだ心は未熟です。旅に出ていろいろな経験をし、さまざまな困難を克服することでさらに成長します。何度も転校、転勤をしましたが、好きなこと、今考えれば勝手なことをしながら進歩を遂げていったように思います。最初に書いた大学受験前の引っ越しが、私の人生を決めたような気がします。その当時は最悪と考えていましたが、今となっては最高でいい旅につながったと思います。

（追記）山口百恵のヒット曲「いい日旅立ち」は、「日立製作所」と「日本旅行」から作られた、国鉄のキャンペーンソングとNHKの放送で知って驚きました。